

30年代の時代相とホルクハイマーの位置

清 水 多 吉

1 30年代の位相

「ここからはよく見える。時代は腐爛し、同時に陣痛に見舞われている。情況は惨めであり、嫌悪すべきであって、脱出すべき道さえゆがんでいる。だが、確かなことは、この道のはてがブルジョア的なものではないだろう、ということだ。」⁽¹⁾これは、30年代後半からの予感がはっきり現実のものとなった30年代初頭、この時代の困難さを遺産として残すべく書きとめられたE・ブロッホのエッセイ集から引いたものだが、30年数を経てなおかつ、この心象風景は色あせていない。というのは、現にわれわれが当面している70年代も、依然として30年代にはじまるブルジョア社会の一段階の行程——それを高度発展社会とよぼうと、国家独占資本主義とよぼうと、あるいはまた後期資本主義とよぼうと——を歩んでいるからである。これを逆に言うなら、30年代に提起された諸問題は、あの第二次大戦、戦後の50年代、60年代をもってしても、基本的に何らかの解決をみていないどころか、むしろますます時代の構造的体質として根づき、30時代の諸相を色濃く染め抜くようになってきている、ということである。

勿論、この間、30年代以降の時代相に批判なり、反省なりがもたれなかったわけではない。他の論文でも指摘しておいたところだが、⁽²⁾ 40年代後半から50年代初頭にかけて、大衆国家と独裁といった問題にせよ、ファシズムの本質と戦後における諸問題といったテーマにせよ、あるいは近代理性の腐敗とその超克といった理念にせよ、一応は論じられた歴史がある。しかし、この時代の諸論争は、大戦を生きのびた人民戦派コミュニスト、戦後のブルジョアの諸改革のなかで理論的活躍をしいした市民主義者、あるいは戦前からの伝統的近代主義者などによって担われ、展開された以上、30年代に提起された諸問題の本質を必ずしも受けとめることはできなかった。例えば、ファシズムのイデオロギーを伝統的合理論の系譜からはみ出した・非合理の系譜の最末端としてしか理解しえなかったルカーチ、伝統的ブルジョア社会の崩壊を知り、反ファシストとして活躍しながらも、なおかつ自由のための計画化といったような形容矛盾に行きつかざるをえなかったマンハイム、ファシズムの大衆心理を分析しつつも、それをブルジョア社会の病理としてしか把

握しえなかったS・ノイマン……等の例を思い起してみればよからう。反ファシズム諸国の軍事的勝利と、戦後のめくるめくばかりの「理性」と「自由」の時代は、必ずしも実りある思想的営為をともなったものではなかったのである。

端的に言って、30年代は近代ブルジョア社会の一部が病み、かつ腐爛してファシズム、ナチズムを発生させたのではない。ブロッホのアフォリズムめいた冒頭の述懐にもある通り、時代全体が腐爛し、陣痛に見舞われていたのが、40年を経てなおまだ何も生み出されていない、というまでのことである。それは、30年代におけるファシズム国家ばかりのことではなく、反ファシズム諸国についても同断である。これを経済的側面からなら、国家独占資本主義への歩みは、ファシズム国家反ファシズム国家の両者に共通の現象であったし、今日もなおその状況は続いている、と説明しうるかも知れない。要するに、ブルジョア社会、およびその経済的秩序は、19世紀以来何度か振動を起し、この20世紀の30年代において決定的破局を迎えたのである。ブルジョア社会がなおその本質を維持して、延命をはかるには、強大な権力、むき出しの暴力、強圧的な統制を必要とした。具体的に強権をもって国内の諸契機と同質化をはかろうとするか、無害な異質部分を放任するかは程度の問題でしかなかった。30年代半ば、コミュニストまでが同質化政策（人民戦線）をとるにいたった以上、西欧諸国がコミュニズムの存在を許したなどということは、何ら時代の腐爛に身を堅持したあかしにはならないのである。

19世紀後半以降、何度か振動を起しながらも、その秩序をからくも維持してきたブルジョア社会、この社会がもったイデオロギーを、もし哲学史的に述べるなら、新カント派をもって代表させることもできるだろう。19世紀60年代からはじまる新カント派の諸潮流を一言にして要約することは無謀に近いことを承知の上で敢えて要約するなら、新カント派の各派とも、カントの批判主義が当時のあらゆる科学の基礎をなすものと考え、哲学一般は科学であらねばならないと考えたのであった。このような思考性にもとづいて彼らのうち幾人かは諸学を分類し、それら諸学を基礎づける。しかし彼らの事実認識はあくまでも悟性的であった。それも、世界像がまだ秩序ある統一をもっている限り、それなりの有効性もちえ

た局面もあった。だが、世界像がゆらぎはじめ、崩壊の危機に瀕しようとするとき、新カント派の認識論もまたその有効性を決定的に喪失することになる。今世紀10年代、⁽³⁾ ある一部ではより以前からその兆は見えていたのだが、静的、悟性的な新カント派的認識論から、新たな動的な精神科学への要請が、両大戦間の時代にやってくる。1931年という年は、このような傾向にますます拍車をかけることになった。この年は、あたかもヘーゲル死後百年にあたり、百年祭を記念して、ヘーゲル・コンGRESがもたれ、⁽⁴⁾ 文献学的成果が次々と発表されることになったわけである。カントにかわって、「死せる犬」は蘇り、新ヘーゲル主義、あるいはヘーゲル・ルネッサンスが声高にさげられるようになる。哲学史、思想的にも、両大戦間の時代は新たな事態へと大きく転換した時期であったのだ。しかし、この時期の思想状況は、時代全体が腐爛していたのであって、腐爛する19世紀的なものと、生れ出ようとする新たなものとの、時代の深部で熾烈な火花をちらし、あるいは燐光のごとき境界不明の光をはなって切りむすんでいたのである。

2 ヘーゲル・ルネッサンス

新カント主義から、新ヘーゲル主義への移行をとげた・あのH・グロックナー——今日、われわれは彼の名を、ヘーゲル文献学者、ヘーゲル全集編纂者という地味な業績でしか記憶していないのだが——が、このヘーゲル・ルネッサンスについて、次のようなナイーブな評価を加えている。「われわれの時代は何を求めているのか？それは、われわれのもっとも個人的な魂の救済が依るべき重大な瞬間に、再びかぎりない関心を示すよう求めているのだ。『存在』や『時間』が時代の問題、つまり、『現在』の問題、直接経験された『現象』や『実存』の問題に答えようとしている。ケルケゴールやニーチェ、ある観点からならカントさえも、今日アクチュアルなものをもっている。彼らについては大いに論ずる必要がある。これに反して、ヘーゲルについては何も論ずべきものがない。今日、ヘーゲルを志向する者は、何がしか現代の困難さについて思いわずらうことなく、単にヘーゲルにとりくんでいるだけである。彼が天国に行けるか地獄に落ちるか——ケルケゴールならもっぱら興味を示した問題なのだが——などということは、彼にはどうでもいいことなのだ。彼はまず『己れ』にではなく、『世界』に関心をよせている。ヘーゲルが世界の担い手であったかぎり、つまり、おどろくほどの即物性でもって、あのような『全体』を束ねることを理解していた巨大な精神であったかぎり、そのかぎりでは、彼はヘーゲルに魅了されることを感ずるのだ。ヘーゲルの体系は、彼にとって、多分、時代の困難さからの救済となってい

るのである。』⁽⁵⁾

この一節の背景には、「ヘーゲル問題は、今日のドイツにおいて、まずカント問題である」とするグロックナーの姿勢が秘められている。しかし、そのようなグロックナーにして、自分のヘーゲル観とは別な理由で、ヘーゲルがもてはやされていることを、認めないわけにはいかなかったのである。悟性的認識の時代が破産し、時代の困難さが精神史にも大きな影を投げかけ始めると、個別性への沈潜と、グロックナーも不本意ながら認めているように、壮大な体系の再構築への思考性が生れてくる。しかし、その壮大な体系は、勿論、ヘーゲルそのものであるわけではない。「われわれは、今日、もはやヘーゲルそのものには直接親密ではありえない」⁽⁶⁾ からである。新カント主義がカントそのものではなかったように、新ヘーゲル主義もヘーゲルそのものの復興ではなく、この時代に応じたヘーゲル像を構築したのである。

ところで、両大戦間のヘーゲル・ルネッサンスにいたるまで、少なくともヘーゲル研究には、2、3のモーニェメンタルな著作があり、これらが多かれ少なかれ、新ヘーゲル主義のヘーゲル像に大きな影響をおよぼしてきた。次にグロックナーの整理に則しながら、前史を含めた新ヘーゲル主義とその周辺の系譜をたどってみたい。

その一つは、ディルタイの「ヘーゲルの青年時代史」⁽⁷⁾ から端を発し、H・ノール、G・ラッソン、J・ホーフマイスター、T・ヘーリングと続く、ヘーゲル文献学の系譜である。これらの人々は、すぐれた文献学的研究によって、ヘーゲル哲学の発展史を追い、弁証法成立過程を跡づけたのである。特に、ディルタイの「生の哲学」からする青年ヘーゲルの解釈は、従来の古典哲学の思考性の枠を破るものであり、生のもつ非合理的な要素を弁証法の中に読みこむ姿勢はよかれあしかれ、その後のヘーゲル・ルネッサンスに決定的な影響をおよぼすことになった。

次に、新カント派の理論的一認識論的素養を経て、なおかつその危機と崩壊とを経験した人物の代表に、R・クローナーをあげることができる。新カント主義からヘーゲルをとりあげ、ないしは、新ヘーゲル主義に移行した多くの人は、カントのなかに内在していた要素がヘーゲルにおいて全面的に展開されたのであるとする立場に立ち、だからこそヘーゲル問題はカント問題であると主張したのである。その他、新カント的思考性の危機を感じとっていた人々の多くはまた、心理学、現象学、新しい存在論、人間学などによってその危機を乗り越えようとしたのであったが、クローナーはむしろドイツ古典哲学からの再出発によって、それをなそうとしたのである。クローナーは折にふれてヘーゲルを非合理主義者と呼び、弁証法の性格を非合理的なものと規定している。

何故なら、クローナーによれば、ヘーゲル哲学の体系は歴史性に規定されたものであるが、それはとりもなおさず、超歴史的なものとしての体系(理性)が、歴史性(非理性)によって規定される、ということの意味からである。クローナーは、ヘーゲル哲学体系を貫く論理(ヨーロッパの伝統的思考性)が、精神史を構築しようとするとき、いかにその内部に非合理的なものを内在させざるをえないものであるかを、哲学的に主張しようとしたのである。⁽⁸⁾

第三に、新カント主義の危機を新しい存在論の探求によって打開しようとした立場のヘーゲル観として、N・ハルトマンの例をあげることができよう。勿論、この系譜に属するハルトマンにせよ、ハイデッガーにせよ、ヘーゲル主義者ではない。しかし、この系譜のヘーゲル観をみることは、当時ヘーゲルがどう取扱われていたかを知るのに有力な手がかりとなる。ハルトマンの立場が、よく客観的形而上学といわれているように、彼は新カント派(特にマルブルク学派)的な認識の優位に対して、認識以前に既に存在している或るもの=存在の優位を主張した。このような観念からする彼のヘーゲル観において、弁証法はヘーゲルのすべてではなかった。それのみならず、カントからヘーゲルにいたるドイツ古典哲学の全形式(観念の展開形式自体)もまた、さして問題ではなかった。彼にとってはむしろカントからヘーゲルまでの古典哲学がとりあげた内容こそが問題⁽⁹⁾だったのである。ヘーゲルから弁証法を欠落させ、ヘーゲル哲学の素材を、存在層を分析する際の手がかりにしようとするだけのハルトマンの立場は、近似的な思考性をもっていたM・ハイデッガーがそうであるように、必然的に静的な思考、あるいは存在についての静的生態学に終らざるをえなかった。

以上のようにして、ヘーゲル・ルネッサンスはヘーゲルの原像がそのまま復活せしめられたのでは決してない。また再度言うが、そのようなことがありうべきはずもなかった。新ヘーゲル像は、まさしく時代の困難と危機とを反映していたのである。生の意義の強調といい、文化哲学における非合理的ものの再発見といい、また存在への回帰といい、悟性的認識の時代の破産と、新たなものの誕生のための昏迷を意味していた、といつてよい。この様相を、自由主義的新カント派が満足せしめえなかった・帝国主義的ブルジョアのイデオロギー的要求を、かわって新ヘーゲル派が担うべく立ち現われてきたものであると説明するルカーチは、事態の一面をしか伝えていない、というべきである。ルカーチにとって、新ヘーゲル主義者は神秘主義、非合理主義の代弁者であり、神秘主義、非合理主義はまた超歴史的に反動であり、30年代当時なら、⁽¹⁰⁾ すべてファシズムにつながるものであっ

た。しかしこのような単純な図式的思考をつき破るのは、それほど困難なことではない。かつて、中世末期の神秘主義は近代的思考の母胎となったはずであるし、非合理的千年王国説は民衆の現状否定のエネルギー源となったはずである。むしろ、合理的思考の方が反動的役割を果たしたことさえしばしばある。この30年代として例外ではない。新ヘーゲル主義が、非合理的要素を強く主張したのは、何よりも19世紀以降のブルジョアの理性、合理性が、そのものとしては実質的に機能しえなくなったからであり、時代の再生、文化の再生を求めて、19世紀の合理性によっては把握しえない要素が、現に望まれていたからである。より政治的に言うなら、確かに新カント派のおおかたは、自由主義的ブルジョアジー、あるいは修正マルクス主義者よりなっていた。ところで、彼らのおおかたは第一次大戦から政権を担い(修正マルクス主義の場合は戦後)、この30年代にいたって、従来の自由主義的政治理念、修正マルクス主義的政治技術をもってしては、事態收拾の不可能を彼らみずからがさとつたのである。したがって、このような事態に対するアンチ・テーゼとして抬頭したヘーゲル・ルネッサンスのもたらした政治的意味は、勿論、ルカーチの指摘のごとく、ブルジョア社会の崩壊を強権をもってくいとめ、再編成する反革命としてのファシズムにつながる要素をもっていた。イタリアにおけるG・ジェンティーレなどが、さしずめその代表例であろう。だが、肝心のナチス・ドイツにおいては、ヘーゲル・ルネッサンスが否定的にとりあつた事実を忘れてはなるまい。

ナチス・ドイツにおける代表的イデオログとして、A・ローゼンベルクをあげるのに、誰しも異存はないであろう。その彼の著書「20世紀の神話」⁽¹¹⁾には三度ほどヘーゲルの名が出てくる。しかしそのいずれもがヘーゲル非難である。曰く、ヘーゲルは抽象的権力理論の最頂点に位する人物であり、有機的民族共同体に反対し、民族そのものを軽蔑していた、というのである。C・シュミット、A・ボイムラー、E・クリーク、F・ベームなど、ナチス時代のイデオログたちは、いずれも、大なり小なり、ローゼンベルクの見解からヘーゲルに反対していた。特にC・シュミットにいたっては、「第三帝国」の法哲学的基礎づけを行ない、国家—運動—民族のトリアーデをもって、国家—市民社会—一家族のトリアーデを主張するヘーゲルに反対し、「ヘーゲルは、カール・マルクスとレーニンとを経て、モスクワへと流れて行く」⁽¹²⁾と指摘している。いずれにしても、ナチス・ドイツの一般的反ヘーゲル主義をおもえば、ルカーチの言うように、ヘーゲル・ルネッサンスがもたらしたものは、すべて反動的潮流であり、ファシズムにつながるなどという短絡した見方はできないはずである。

3 マルクス主義との関連

では次に、これほどまでの文献学的研究がマルクス主義陣営にはどのような影響をおよぼしたかをみておく必要がある。端的に言って、ソヴェト・マルクス主義は、この頃機械的唯物論化されたスターリズムに毒されており、ヘーゲル・ルネサンスの影響などは皆無であったと、いいよ。革命後、一時的に噴出した新たなる文化要素も、この頃ではすべて抹殺されており、西欧世界の流動化（勿論反革命的流動化をも含めての話だが）に反比例して、固定化への道を歩んでいた。事態が固定化への道を歩む以上、悟性的認識を越えた・ダイナミックな理性など必要としなかったのである。たとえ、建前としては弁証法をどれほど繰返えそうとも、その弁証法が悟性的なものであり、唯物論が機械的なものであるかぎり、弁証法的唯物論などはまったく羊頭狗肉以外の何ものでもなかった、と、いいよ。教条的マルクス主義者に近い立場で、わずかに、モスクワ亡命中のルカーチだけが、例外的にこのヘーゲル・ルネサンスに反応した人物としてあげることができるだろう。だが、不幸なことに、20年代初期までに、誰よりも西欧世界の崩壊を内的に体験したはずの彼にして、このヘーゲル・ルネサンスのもつ意味を理解しえていない。その理由を、彼の現実政治への屈服に求めることも出来るかも知れない。だが、この説明は、ファシズムよりまだしもスターリズムの方がまだましだ、という思想的営為にとっては許しがたい怠慢へと流れて行く危険性をもつ。あの「歴史と階級意識」(1923年)以降、ルカーチが現実政治へ屈服したことは事実だが、それはひとりルカーチの問題であるのみならず、おしなべて30年代後半から30年代にかけてのマルクス主義一般がおちこんでいた陥穽であった、と、いいよ。

また、ルカーチの思想的歩みは、10年代から20年代前半にかけて、伝統的西欧世界の驕りを内なるものとしたインテリゲンチヤが、20年代後半以降、伝統世界の復興（たとえわずかな間であったにせよ）とともに、かつての驕りを放棄していった代表例としてあげることができる。澎湃として動乱の気運のみなぎっていた革命直後のモスクワではなく、スターリン体制下における旧価値観の復活がいちぢるしいモスクワに亡命（1929年）の地をえらんだことが、そのことに拍車をかけたはずである。おそらく、ヘーゲル・ルネサンスのもつ意味を十分に理解し、思想的営為を今日もなおかつ続けている人物としては、やはり、E・ブロッホをあげることができるだろう。ヘーゲルに関する大きな著書とは別に、32年に書かれた弁証法についての小論において、彼は次のように述べている。「革命的弁証法とは後期資本主義によって措定され

た矛盾の一つであって、ヒットラー運動の金庫となったような自由で措定しうる矛盾ではない。だが、革命的弁証法が真の非同時性と異質な矛盾の素材とをその根底において『支配』しているものでなければ……3つの同盟（註、プロレタリアート、農民、中産層）におけるプロレタリアートのヘゲモニーも成功がおぼつかないだろう。」⁽¹³⁾ここで言われている異質な矛盾とは従来の理性的把握（それを受けた従来のマルクス主義的把握）にとって「非合理」⁽¹⁴⁾な内容を意味するものであるのは言うまでもない。ルカーチが、没落する中産層のイデオロギーを非合理的なものとして一方的に切りすてたのに反して、ブロッホはその非合理の弁証法への内在化（Dialektisierung）を主張する。だが、そのようなブロッホも長い間、ルカーチの名声の陰にかくれて、第二次大戦前、それほど問題にされることはなかった。

このようなブロッホとの思想的親近性が、第二次大戦前一番強かったのは、次に紹介するフランクフルト学派であったろう。M・ホルクハイマーによって主宰されるこの学派は、丁度ナチスの急速な膨張がはじまる1930年、新設のフランクフルト大学社会研究所に、当時20才台後半から30才台前半までの俊英を多く結集していた。主宰者ホルクハイマーがショーペンハウエルおよびベルグソン、マルクーゼがハイデッガーおよび初期マルクス、アドルノがケルケゴールの影響を受け、ないしはそれらを思想的営為の出発点としていることからわかるように、この学派は、ルカーチの視点からみるなら、近代における非合理的思想の系譜を内在させており、その意味で、ヘーゲル・ルネサンスのもっていた時代的意義を如実に反映していたといえる。この学派については、また「新ヘーゲル・左派」⁽¹⁵⁾あるいは多少うがった言いかただが「マルクス主義的ニヒリズム」⁽¹⁵⁾という評価もある。それは、新ヘーゲル派のおおかたがダイナミックな社会に対する総合的な理性を求めたといいつつも、ある場合には文化の側面における新しい考察であり、またある場合には人間学における新しい視野の開拓であったのに比して、このフランクフルト学派は、同じ思考性に依拠しつつも、ダイナミックな社会的現実そのものに対する批判の視角をもち、精力的に社会哲学、社会理論の構築をめざしたからである。社会的現実に対する批判を志向するかぎり、この学派はまた、従来のマルクス主義諸概念がもつ不十分さにも批判的であらざるをえなかった。そしてまた、伝統的理性論、近代の合理主義が陥った陥穽を、しばしば、ショーペンハウエル、ケルケゴール、ニーチェをもって批判し、なおかつこの系譜をブルジョア社会の正当な批判者と評価している側面が、「マルクス主義的ニヒリズム」といわれる所以でもある。

ところで、ブルジョア社会についてのこれほど根底的

な批判を遂行していたにもかかわらず、この学派が他方で、従来のマルク主義諸概念に対して行なった批判は、まったく誤解されてきたとあってよい。それは、スターリニズムに毒された教条マルクス主義が、20年代以降、第二次大戦後の50年代後半まで、思想的にも政治的にも全能性を誇ってきたからであるし、そのためにまた、この学派の批判は長い間、右翼社民系の批判と混同されるという不幸を担ってきたのである。だが、実際には、この学派は右翼社民どころか、近代ブルジョア社会の最末端としての右翼社民まで含めた近代の頽廃を批判し、教条マルクス主義がそのような現実を内在的なものとして、批判しえなかった事態に対して批判を加えたのであって、第二次大戦後の60年代後半以降、ヨーロッパ新左翼が、30年代のこの学派の主張を、己れの思想的源流としたのもまた当然であった、とあってよい。

4 ホルクハイマーの思想構造

フランクフルト学派は以上のような位相にあるが、その主宰者ホルクハイマーには、30年代において、直接ヘーゲルないし弁証法を主題としてあつかった論文、著書はない。それは、彼自身、30年代の諸論文を集大成したときに、己れの著書に社会の「批判理論」と名づけたことによってわかる通り、戦前の彼はむしろ従来の諸観念、諸理論の批判的考察をもっぱらとしていたからである。それらの批判的考察をなすにあたって、彼の問題意識の根底には近代における学問総体に対する危機と時代の危機とが、二重映しになっていた。「学問の危機について正当に語ろうとするかぎり、それは一般的危機と切り離して語ることはできないのだ……何故なら、社会的機能としての学問は、現在、社会の矛盾を反映しているからである。」⁽¹⁶⁾ 彼の眼にうつった学問の危機とは、近代合理性の形骸化であり、図式化であり、そのことはとりも直さず、ブルジョア社会の内的危機を反映するものであった。ホルクハイマーにとっては、あの古典哲学を貫徹している理性的なものが、マルクス主義に結実し、由来、弁証法的唯物論がブルジョア社会の非合理性に対決しうる唯一のものになっているなどというルカーチのオプティミズムはまったく受け入れられないものであった。今日では、ある程度一般性をもつにいたった見解だが、その理由はこうである。マルクスにとって唯物論の基礎になる自然は、人間化され社会化された自然であった。したがって、このような自然をもとにして展開される弁証法は、歴史的なものにならざるをえない。しかるに、この自然を人間的なもの社会的なものとしてではなく、素朴に実在する自然としてとらえ、これに図式化された弁証法を適用するならば、恐るべきドグマに陥らざるを得ない。30年代のルカーチとはちがって、ホルクハ

イマーにとっては弁証法的唯物論に代表されるマルクス主義もまた、理性の怠慢または内的腐敗以外の何ものでもなかったのである。

ホルクハイマーに言わせると、弁証法自体は、そもそもヘーゲルにおいてさえ、超経験的な視点からのものではない。弁証法の基礎になるヘーゲルの理念を考えてみればわかるように、それは決して抽象的なものではない。たとえば、理性の発現形態といわれる自由の契機一つをとってみても、いかにそれが具体的なブルジョアの自由を想定したものであるかわかるだろう。いずれにしても、ヘーゲルにおける弁証法は、決して硬質な幾何学的図式ではなく、人間の衝動と情熱の軌跡としてとらえられねばならない、というのである。「ヘーゲルは弁証法的原則の展開によって、また更には、内容的に述べられた弁証法的記述によって、個々の概念のうちに、分析的にえられたものが、生き生きとしたプロセスを思考によって再構成しているわりには、いかに実りゆたかなものとなっているかが示されている。だがヘーゲルにおいては、実際のところ、ただ一つの大きなプロセスだけがあるのだ。そのプロセスはあらゆる概念をその契機として内部に含んでいる。そしてこのプロセス、この『具体的なもの、一者』を、ヘーゲルは一度だけのものとして理解し、記述しているにすぎない。」⁽¹⁷⁾ 弁証法という記述のなかにもられた個々の生き生きとしたプロセスの指摘に、ルカーチが単純に否定しきった「非合理的なもの」の評価を認めることもできるだろうし、あるいはまた、新ヘーゲル主義を準備したディルタイの「生」の哲学をなぞらえることもできるだろう。事実、ホルクハイマーは、ディルタイがヘーゲルの体系のなかに経験的・個別的⁽¹⁸⁾ (empirisch—individualistisch) 意味を求めたことを、それなりに評価し、ただディルタイの失敗は、そのことによって、和解しえないものを和解させようとしたことであるとしている。

しかし、再度言うが、ホルクハイマーは、ヘーゲル哲学、特に弁証法について特別積極的な定義をしているわけではない。ホルクハイマーにとって、弁証法とは「悟性の論理」と「生き生きとしたプロセス」との相互否定関係としてとらえられる。「ロゴス的なものの弁証法的側面は、同時に『否定的—理性的』なものでもある。」⁽¹⁹⁾ したがって、ホルクハイマーは、完成した弁証法的論理のなかでも除去しえない躍動する現実の追求に関心をよせる。ホルクハイマー著作集の編纂者であるアルフレッド・シュミットの指摘によれば、そのことは、ホルクハイマーをして「具体的人間学」をめざさせることになる。だが、その「人間学」はM・シュラー的な歴史の弁証法的性格を無視するような静的類型学ではない。フランクフルト学派共同の研究テーマ（その総論に、ホルクハイ

マーは、文化—権威—家族をめぐる論文『権威と家族』(を書いている。)がある「権威と家族についての研究」がそうであるように、ホルクハイマーの意図したものは、「ヘーゲルのごとく、現実の歴史を『超』個人的構造から把握し、追求する」⁽²⁰⁾ことである。

30年代のホルクハイマーは、多くの小論文の形でもって、伝統的理性論の批判を積重ねた。それは、みずから伝統的理性論にくみしつつ社会批判、文明批判をとねえるルカーチと対決する位置に立ちつつ、認識論をすてて新しい存在論への変転をはかった、ハルトマン、ハイデggerとも対決する位置に立つ。伝統的理性論、精神の実体としての理性論は、その内的必然性にもとづいて自己解体をとげてきたこと、そしてまた自己解体をとげることによって、逆に理性は道具として万能の力をふるってきていることの認識論的確認、それがホルクハイマーの意図したことであった。「批判的理論」の最初の論文が、「学問と危機」であるのは意義深い。おそらくホルクハイマーの思考性は、晩年のフッサールの「ヨーロッパ的学問の危機と先験的現象」——所謂「危機論考」——にもなぞらえることができるだろう。事実、ホルクハイマーはフッサールを「最後の認識論者」として、それなりに彼の業績を評価している。⁽²¹⁾ホルクハイマーにとっても、フッサールにとっても、学問の危機とは近代における理性の壮大な破産であったし、それはとりも直さず、近代そのものの崩壊であったのである。

ホルクハイマーの意図したものの各々は、フランクフルト学派のそれぞれに受け継がれ、独自の展開、独自の労作を生んでくることになった。弁証法にひそむ否定的側面の追求は、否定の弁証法という形でアドルノに、歴史のなかで躍動する個別的なものの社会心理学的追求は、フロムおよびマルクーゼに、あるいは、伝統的理性論に依拠しつつ、その頹廢に気づかないソヴェト・マルクス主義批判はマルクーゼに……。

要するに、ヘーゲル・ルネッサンスが生んだ一つの成果であるフランクフルト学派は、ついにヘーゲル・エピゴネンをも含めて、近代精神そのものの腐爛を確認したのであった。多分、このような思考性に対する次の問題点として、同じく近代の崩壊を主張して立ち現われてくるファシズムとの対比が問われるところであろう。詳細には別論文で述べておいたところだが、⁽²²⁾フランクフルト学派とファシズムとは、同一の問題意識をいだきつつ、——だからこそ、両者は30年代という時代の深部で燐光のごとき光を放って切りむすんでいたのだが——その主張するところはまったく対極のものであった。ファシズムは所詮より強固な近代の継承を、フランクフルト学派は未だ見ぬ近代を越えた何ものかを。だが、「時代は腐爛し、同時に陣痛に見舞われている。情況は惨めで

あり、嫌悪すべきであって、脱出すべき道さえゆがんでいる」事態は、30年代以降、今日もなお依然として続いているのである。

追記 この論文は、M・ホルクハイマー著「道具的理性批判」拙編訳(イザラ書房刊)に転載されてしまっている。しかし、もともとは人文研紀要の論文であり、こちらの刊行が遅れてしまった故の処置であることを付記して、おわびにかえたいと思う。

註

- (1) Ernst Bloch, *Erbschaft dieser Zeit*, Gesamtausgabe Band 4, Suhrkamp, 1962, S. 15.
- (2) 「情況」69年9・10月号, 拙稿「イデオロギーとしてのファシズム」参照のこと。
- (3) ちなみに新カント派の立場からするヘーゲル復興の声は, W. Windelband, *Die Erneuerung des Hegelianismus*. Sitzungsberichte der Heidelberger Akademie der Wissenschaften. Heidelberg, 1910.
- (4) 30年ハーグ, 31年ベルリン, 33年ローマでもたれ, そのプロトコールは Baldus Wigiersma で出されている。
- (5) Hermann Glockner, *Hegelrenaissance und Neuhegelianismus*, Logos, 1931, Heft 2, S. 171.
- (6) Ibid., S. 170.
- (7) Wilhelm Dilthey, *Die Jugendgeschichte Hegels*, Neuausgabe bei Verlag Teubner Stuttgart, 1959.
- (8) Richard Kroner, *Von Kant bis Hegel*, Tübingen, Paul Siebeck, 1921 und 1924.
- (9) Nicolai Hartmann, *Die Philosophie des deutschen Idealismus*, Zweiter Band: Hegel. Berlin und Leipzig, Walter de Gruyter, 1929.
- (10) Georg Lukács, *Der Junge Hegel*. Band 8, Luchterhand 1967. S. 16ff.
- (11) Alfred Rosenberg, *Der Mythos des 20. Jahrhunderts*. Hoheneichen Verlag München, 1930.
- (12) Carl Schmitt, *Begriff des Politischen*, München, 1932. S. 50.
- (13) Ernst Bloch, *ibid.* S. 123.
- (14) Ibid., S. 126.
- (15) Leo Kofler, Adorno und Lukács, in "Politikon," Juni 1964. S. 20ff. 中の用語である。
- (16) Max Horkheimer, *Kritische Theorie*, S. Fischer, Band I, 1968, S. 7.
- (17) Ibid., S. 144.
- (18) Max Horkheimer, *Kritische Theorie*, Band II, S. 283.
- (19) Band I, S. 141.
- (20) *Kritische Theorie*, Band II 中の Alfred Schmidt Nachwort, S. 344.
- (21) Band II, S. 96.
- (22) 前掲「情況」拙稿を参照されたい。